

スタインベックの日本滞在記

——国際ペン東京大会へ

上 優二

ジョン・スタインベック (John Steinbeck, 1902-1968) は一九五七年九月に東京で開催された第二九回国際ペン大会に、ジョン・ドス・パソス (John Dos Passos, 1896-1970) らとともに招待を受け、アメリカペンクラブの代表として開会式 (初日) の閉会の辞を述べた。彼のスピーチの全文は、第二九回国際ペン大会の報告書に以下のように記録されている。

ここに立っていることを嬉しく、名誉なことであると思っていますが、少し驚いてもいます。今朝まで、自分が今日、話をする事になっていることを知らなかったからです。そしてこのことはひとつの美德を、それは偶然ではありますが、とても切実なことを教えてくれました。私の発言は手短かにすべきであります。私は今回の会議と身近な関係をもっています。この会議はアジアではじめての開催となり、私にとっても、どこであれ、はじめて参加する会議となるからです。私は未知の経験を心配しながら、ニューヨークを出発するとき、とても素晴らしい友人が忠告をしてくれました——「君は大丈夫だよ、ただ聴いて (listen) いればいいんだよ」と。しかし、そのことを考えたときに、聴いているだけでは不十分だ、聞く (hear) ことも大切だと。聴くこと (listening) には多くの理由があります。あるものは好ましく、またあるものはごまかしのものもあります。聞くこと (hearing) の唯一の目的は理解することあります。私は日本ペンクラブの持てなしに感謝しています。そしていま聴く (listen)

ために、願わくは、聞く (hear) ために席に戻ります。

(the Report: Twenty-ninth International Congress of the P.E.N. 二七)

スタインベックはこの短いスピーチの後、本当に自分の席に戻っている。『チャーリーとの旅』でみせた彼独特のユーモアを想起させる逃げ口上であるが、さぞかし日本ペンクラブの関係者を驚かせたことであろう。ふつうはこうした話は前段のジョークとなり、その後、本題へと進んでいくことになるからである。

ジャクソン・J・ベンソン (Jackson J. Benson) はスタインベックが日本ペンクラブ (会長・川端康成) の招待を受ける気になった、その狂気を思い出せなかったとし、「たぶん東洋を見たいという一瞬の衝動にかられたのかもしれない」(『真の冒険』 八一八) と推測している。そしてその前後の彼の心情を「……彼は自分が組織、議事日程や晩餐会やスピーチを嫌っていることを忘れていた。彼は会議が近づくにつれ、きっと自分は病気になるものと期待していた。しかし、病気にはならなかった。それで彼は日本に行き、それを早く片付け、できるだけ早く帰国しようと決心をした」(『真の冒険』 八一八) と伝えている。しかし、物事はスタインベックが思惑通りには進展しなかった。彼は期せずして、開会式 (初日) の、閉会の辞を述べることを依頼され、短時間でその準備をしなくてはならなかった。彼はこの頃の状況と自分の気持ちを書いたイレインに宛てた書簡 (一九五七年九月一日付) のなかで以下のように記している。

電話が鳴り、また電話が鳴っている。[しばらくして] ……私は一日中際限もなくインタビューを受けている。そして上品な言い方をすれば、私はケツをいやいや引きずって対応する。……インタビューの質問は興味深く、そして議論は楽しかった。しかし、それは疲れるものだ。僕のスピーチが明日予定されていることが、今わかった。これは聞いていなかった。最短記録のスピーチになること、間違いないね。

(『書簡集』五六六)

彼はもともと人前にも講演をすることも不得意で嫌いだった。彼は二日後、イレインに宛てた書簡 (九月三日付) のなかでも、「昨日の朝、私はバスタブで新聞を読んでいたら、恐ろしいことに、開会式の、閉会の辞で自分がスピーチをすることになっていることに気づいた。彼らは一切私にこんな話はしなかったのだが」(『書簡集』 五六七) と再び述べて、自分の苦しい心境を吐露している。

当日彼は、まばゆいライトに照らされパニック状態になり、中央席に座った。そして、都知事が三〇分間挨拶をした。日本の総理大臣が四五分間のスピーチをした (彼はこれを日本語とばかり思っていたが、後で英語だったと知らされた)。その後、国際ペンクラブ会長の熱烈な演説、インド代表の長い祈りへと続き、ついに彼の番がやってきた。万雷の拍手が起こり、彼のスピーチが開会式のハイライトであることが分かった。こうして彼は日本全国を照らすようなライトを浴び恐る恐る演壇にたつことになった。彼はイレインに宛てた同じ手紙のなかで、こうした状況を述べたあと (『書簡集』 五六七-六八)、続けて以下のように記している。

ぼくは前のめりに顔面から落ちないように、ポーリングの玉のグリップに指を突っ込むようにして、演説台を押さえつけていた——それから突進した。ぼくのスピーチを同封するよ。この記事は抜粋じゃないよ。本当にこれがすべてで、正確に引用されたものだ。通訳がついていたが、三分しかかからなかった。それでたぶんその簡潔さからの安心感からか、最後は大騒ぎになった。すべての新聞がこれを掲載していた。それは日本の歌、すなわち俳句にたとえられていた。なかには、音譜がついているものもあった。

(『書簡集』 五六八)

このエピソードは彼の性向やユーモアの一端を示すものだが、その短い日本滞在は意外と多くの貴重な足跡を残している。しかし、こうした足跡は彼の母国アメリカをはじめ海外の研究者にもあまり知られていないか、もしくは注目されてこなかった。たとえば、彼は大会前日に、帝国ホテルの個室で毎日新聞社の記者の独占インタビ

ユーに依拠しているが、その一部をまずはここに紹介しておく。

——核兵器を中心とした最近の世界情勢をどう思うか？

… …いま列強が、原水爆があるために戦争をしないということは、考え方によっては非常に悲惨なことである。つまり戦争が良心によってふせげるのではなくて、自己保存という事態によって押しとどめられているというのは本当ではないということだ。

(中略)

——あなたの宗教的立場は？

私はしいていえば、たぶん人間性とでもいおうか、キリスト教を宗教として受けとっていない。だから私の宗教はとってきかれば、宗教はない、と答えるほかはないのだが…。まア(ママ)、人間を信じるとのことだね。

(『毎日新聞』一九五七年九月二日、一三)

この二つの短いやりとりは、当時の世界情勢と彼の核兵器に関する認識、また彼の宗教的立場を知るうえで、貴重な資料となっている。少なくとも核兵器を保有することで平和の維持を保つことができるとする「核抑止論」が相互不信、恐怖から生まれ、人類の本来の有り方に反するとする、彼の認識を示している。また宗教的立場に関しては、彼がキリスト教を宗教と理解していないこと、しかも彼が特別な宗教を信じているわけでもなく、ただ人間の本性、理性、神性を信じていたことを示唆している。彼はその後さまざまな質問を受けたあと、今回の国際ペン大会のメインテーマ「東西両文学の相互的影響」についても質問を受けている。この時彼は「正直に言って、今回の大会については、何も知らない」とただコメントしただけで、結局はこの質問にはまともに答えなかった。その代わりに、突然話題を変えて、記者に、一人で旅をしていて困っているので、優秀な秘書を探して欲しいと依頼している。そしておもむろに、その秘書の条件はちょっと厳しいものだと言って、そのリストを記者に手渡している。スー・ヒッチマン(Sue Hitchman)もまたインタビュー中に、同じ依頼を受け、その様子を、「アサヒ・イーヴニング・ニュース」(the *Asahi Evening News*)のなか

に以下のように記している。

突然彼「スタインベック」は机の上に山積みになった手紙のほうを向いた。「私には秘書が必要だ」と彼はこぼした。「私はその条件を書き留めておいた。もしこのリストを掲載してくれたら、助かるのですが」と言う。さて、そのリストにはこう書かれていた——虎のような勇氣、象のような強さ、蛇のような狡猾さ、蟻のような知恵、蛾のような巧妙さ、狐のような利口さ、子供のような活力、蛸のような粘り強さ、IBMの計算機のような効率、日本の侍(赤穂の四十七士)のような忠誠心、スイカズラの甘さ、松の木の静謐さ、愛に目覚めた乙女の美しさ。それにタイプが打てれば、役に立つだろう。給料は少なく、労働はつらく、時間は無制限。

(the *Asahi Evening News*, 3. Sept. 1957, p. 3.)

この記事もまたスタインベックのユーモアの健在ぶりを伝えるものである。この逸話はいくぶんの変化は見られるが、先の『毎日新聞』の記事にも掲載され、たぶん日本の一般読者もこのユーモアを楽しんだにちがいない。『毎日新聞』の場合、最後の条件として「女性に限る」と掲載されている。

さて、先のイレインへ宛ての書簡(九月一日付)によると、彼は日本の昭和天皇が自分に会いたがっていると言われ、自分も会いたいと答えたという。天皇が自分と同様に海洋生物学に興味を抱いているだけでなく、極めて優れた海洋生物の学者だったからである。(ちなみに、その後彼が天皇と会ったという記録は残されていない)。それから、彼は東京へ出発する前に、ウィリアム・フォークナー(William Faulkner, 1897-1962)から日本人が頻繁にお辞儀をすることを好むという情報を得ているが、彼自身、かなり強い印象を受けたようである。彼は「日本滞在中に多くの人々と会い、頻繁にお辞儀を繰り返したので、ウェストラインが下がってきた。… …彼はとうとう食堂の湯沸かし器にまでお辞儀をした」(『書簡集』五六七)とイレインに書き送っている。

九月四日早朝、スタインベックはNHKの「朝のインタビュー」というラジオ番組に招かれて、東京大学の西川正身教授のインタビューを受けている。興味深いことに、これを記事にした日本の英字新聞 *The Mainichi* (一九五七年九月五日付け) の見出しが「ジョン・スタインベック、初のラジオ・インタビュー」(“John Steinbeck Interviewed For First Time Over Radio”)となり、スタインベックが母国アメリカでは、ラジオでもテレビでもインタビューを受けたことがなかったと報じている (*The Mainichi*, 5. Sept. 1957. 3)。ここでも彼は公の場を苦手にしてきたことが想像できる。西川はこの時のインタビュー内容を思い起こし、「スタインベックとの半時間」という回想録を雑誌『英語青年』(一九六三年一月一日)へ寄稿している。この回想録によると、西川が『怒りのぶどう』を書いた動機について尋ねると、スタインベックは「自分は砂あらしのために土地を失った人々と一緒に^{わた}棉を摘み、一緒に暮らし、一緒に苦しんだ。そしてそれらの人々に対して心から同情をおぼえた。また彼らの陥らざるを得なかった惨状を見て激しい憤りを感じたが、自分にとっては、作品だけが、そうした事態に対し、抗議しうる唯一の武器だったからだ」(『英語青年』 四)と情熱を込めて語ったという。西川はこの返答を聞いて、スタインベックの「正義感」を直に感じとれたと回想している(『英語青年』 四)。この回想録は『怒りのぶどう』の創作過程を理解するうえで貴重なものである。というのも、スタインベックは創作当初、持論の「非目的論的思考」の立場から、人々が直面した困窮を客観的に冷静に描写することを目指していたが、と同時に社会の不正に対する激しい憤りも抱いていたことも分かるからである。実際、この作品の語り手は新約聖書の「ヨハネの黙示録」にみられる「怒れる神」になりかわるかのようになり、社会の不正を厳しく糾弾している。

九月六日、国際東京ペン大会を総括する最終会議が開催された。この日、スタインベックは正式に講演をすることになっていたが、参加しなかった。風邪をこじらせたためである。その結果、ドス・パソスがスタインベックの欠席の理由を冒頭に述べて、彼のメッセージ(寸言)を以下のように伝えた。

私はたった今スタインベック氏と会ってきた。彼はもっと多くの会議に出席

できなくて申し訳ないと伝えてくれるように、私に依頼していた。アジア型インフルエンザにかかったということが分かったのです。しかも医者が何か別の病気の治療していたらしいのです。それで今、彼はその薬から立ち直っているのです。彼は良くなると思います。彼はいわゆる錯乱状態のなか、ここで読んだらおもしろいと思った寸言を書いて寄りました。……「礼儀は潜在的な威嚇(強制)(a potential kick in the pants)から生まれる。水爆——もしどの国も水爆を持てば、水爆も平和を推進するハトになるかもしれない」。……「歓待は人間が考え出した最も魅力的な拷問である」。……「闘犬と会議との違いは、闘犬にはルールがあるということだ」。……「プライベートには二つの方法がある。天然痘と貧困である」。「しゃべるから、混乱が生まれる。沈黙していれば、誤解を生じることはない」。……「人間に共通していることは、自分以外を馬鹿だと思っていることだ」。……「武装した民族は多くを殺すだろうし、無防備な民族はすでに滅んでいる」。「どれほど力んでみても、人間の考えることに、国籍や人種の区別などない」。

(the Report: *Twenty-ninth International Congress of the P.E.N.* 二三五-三六)

翌日の『朝日新聞』の朝刊は、「スタインベック氏はカゼのためについに出席できなかったが、同じアメリカの作家ドス・パソス氏を通じていくつかの、多分に文学的な寸言を寄せた」と報道し、彼の寸言に対する場内の反応として「……笑声、拍手、そして軽いざわめき」があったことだけを伝えた。

同じ翌日(九月七日)、スタインベックは再び妻イレインへ書簡を送り、「私はアジア型インフルエンザにかかるために、七〇〇マイルも飛んできたことになる。それでも病気になる方がスピーチよりも良かったかもしれない」(『書簡集』五六八)と、この時の心情を正直に書き記している。また彼は東京の医者から「この病気は精神的なものからきているのですか？ 私はスピーチをするのが大嫌いだ」と相談したところ、医者は「一〇三度(華氏)まで熱を上げるには、確かに強い意志が必要ですね」と答えたという(『真の冒険』 八二〇)。この医者の診断もなかなかのユーモアであると思えるが、それはともかく、スタインベックは「会議が近づくとつれ、きっと自分は

病気になる」(『真の冒険』 八一八)という自分の期待通りに、実際に病気になった。こうして彼は、この会議でのスピーチを免れるという、当初からの目標をほぼ達成することができたのである。

彼の演説嫌いは、今ではスタインベック研究者間ではよく知られているが、彼の突然の欠席は、日本ペンクラブ、マスコミ関係者等の戸惑いは大きかったのではないか。彼はこの他にも、日本滞在中にその人柄、信条、そして人間観を示唆する資料、足跡を数多く残しているが、ここでは割愛する。

一九六二年十二月にスタインベックはノーベル文学賞を受賞した。彼が大の演説嫌いであったとしても、さすがにこの晴れ舞台を欠席することはなかった。このときは丁寧に原稿を準備しスピーチをおこなっている。

彼はまず、「作家の使命が人間精神を向上させることが目的」(六九一)であること、さらに「人間の心と精神の偉大さを示す能力を明言し讃美すること」(六九一)であるとした。他方、「人間の暗くて危険な夢を白日の下にさらしながら、多くの嘆かわしい欠陥や失敗を暴くことであること」(六九一)を付言することも忘れなかった。ここには、人間が「弱さと絶望に対する果てしない戦い」(六九一)に勝利して初めて、「心と精神の偉大さを示す能力」(六九一)を勝ち取ることができるという、彼の人間観が明示されている。彼は「人間の完全性 (the perfectibility of man) を情熱的に信頼しない作家は何の貢献もすることはないし、文学の会員になる資格もない」(六九一)と宣言し、その上で文学が人間とその世界に関する知識を増大させ持続させるという、先導的役割を果たすべきであると強調した。

当時彼は、アメリカ合衆国と旧ソビエト連邦による核兵器開発に伴う軍拡競争を憂慮していた。人類が神と比肩するほどの科学知識と破壊力を獲得したことで、人類とその世界を破滅する可能性を危惧していたからである。実際、米ソ対立という「冷戦」は沸騰し、一九六二年十月に「キューバ危機」が勃発し、核戦争が現実味を帯びていた。彼はこうした時代背景のもと「受賞演説」のなかで、「人類がかつて神に属していた多くの力を奪った」(六九二)ことで、人類が「恐るべき選択の重荷」(六九二)を背負わされていると警鐘を鳴らしている。加えて、文明が進展するにつれ、弱体

化した人間精神がこの世界を破滅へと追いやる起爆装置となりうるという焦燥感、危機感もあった。その一方で、彼はこの危機に対する防御・安全弁の機能を果たすのもまた、人間精神であるという確信を抱いていた。スタインベックは「受賞演説」の結末部において、「初めに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった」(『ヨハネによる福音書』第一章一節)というヨハネの福音を援用し、「終わりに言葉がある、言葉は人間であり、言葉は人間とともにある」(六九二)と述べ、言葉に対する信頼と言葉のもつ力を宣揚した。この言説には、その文脈を辿ると、「①言葉は最終的に、あるいは根源的に人間精神の本質である、②現代文明はその言葉の力を弱体化させることで、その精神も弱体化し危機に瀕している、③ゆえに言葉の復権以外に危機に瀕した現代文明を蘇生させる道はない」という意味が込められている。すなわち、人間は究極的には言葉を通して自己とその世界を認識する生き物であるゆえに、言葉の復権こそが精神文明の蘇生の鍵となるというものである。ここには言葉に対する不信、懐疑はことさら強調されることはなく、むしろ「人間と言葉に対する絶大な信頼」が表明されている。また、援用の基になっている聖ヨハネの福音書と比較するとき、人類の運命を決定するのは唯一絶対神の「神」ではなく、最終的に人間自身であるという人間観も読み取れる。人類が背負っている「選択の重荷」という言説もこの意味で用いられている。これは人間に対する絶対的な信頼から出発し、基本的に彼の「自由意志」論へとつながっていく。彼はとりわけ『エデンの東』において、「人間が善と悪の狭間にあつて、基本的に選択する能力をもつ」という「自由意志」論を展開した。これに即して、彼は「受賞演説」のなかでも、科学の力を制御する人間の心と精神に対する信頼を表明し、「人間の完全性」(六九一)を称揚したのである。

彼はその晩年、ベトナム戦争をはじめアメリカ社会の墮落、腐敗を目の当たりにして慨嘆し、危機感を抱き葛藤しながらも、最後まで人間に対する信頼、人類の未来に対する希望を失うことはなかった。

なお、一九六六年に出版された『アメリカとアメリカ人』(America and American, 1966)のなかで、彼は広島と長崎に原爆投下したことを正当化しようとする勢力を厳しく糾弾することになるが(130)、ベトナム戦争の悲惨な結末も知らないまま、

一九六八年に六六歳でその生涯を終えている。

Works Cited

- Benson, J. Jackson. *The True Adventure of John Steinbeck, Writer*. New York: Viking, 1984. (本稿においては『真の冒険』と省略する)
- Steinbeck, John. *America and American*, New York: Viking, 1966.
- . *East of Eden*. New York: Viking, 1952
- . “Nobel Prize Acceptance Speech.” *The Portable Steinbeck*. Ed.
- Pascal Covici, Jr. New York: Viking, 1979.
- . *Steinbeck: A Life in Letters*. Ed. Elaine Steinbeck and Robert Wallsten. New York: Viking, 1975. (本稿においては『書簡集』と省略する)
- . “Opening Session Address.” *P.E.N. Report 29th International Congress*. Edited by Japanese P. E. N. Centre. Tokyo: Kasai Publishing & Printing Co. 1957. 27.
- . “John Steinbeck Interviewed For First Time Over Radio.” Interview by Masami Nishikawa. The *Mainichi*. Tokyo: 5. Sept.1957. 3.
- . “Steinbeck Talks Shop.” Interview by Sue Hitchman. the *Asahi Evening News*. Tokyo: 3 Sept. 1957. 1.
- Passos, John Dos. “Literary Session.” *P.E.N. Report 29th International Congress*. Edited by Japanese P.E.N. Centre, Tokyo: Kasai Publishing & Printing Co. 1957. 235-43.

和文

- 西川正身「スタインベックとの半時間」『英語青年』一四〇巻 一号. 東京、研究社、一九六三年. 四-五.
- 「スタインベック氏にきく——文学より人間に興味／悲惨な“力による平和”」『毎日新聞』(毎日新聞社 一九五七年九月二日付朝刊 一三版)
- 「東西文学の相互影響——国際ペン大会 文学会議(最終日)から」『朝日新聞』(朝日新聞社 一九五七年九月七日付朝刊 一二版)